「相中相高百年史」より

（　戦時体制下の相馬中学校　８　）

8　学徒動員：五年生（ 相中第 43 期生 ）・・・ペンをハンマーに

③　「紅会（くれないかい）」

工場には福島高女（現福島女子高）の４年生の一部 60 名が動員され、機工、鋳鋼部、検査室等に配属され、モンペにヘチマ襟の戦時服を着て我々同様のきつい作業に汗を流していた。

……　略　……

確かにその女学生たちとは同じ職場で働きながら親しげに会話を交わすことはできず、お互いに恥らいながら顔を見合せる程度で、黙々と働いた。

やがて卒業→進学、就職、工場残留→終戦となり、動員学徒も女子挺身隊員も別れ別れにそれぞれの道を歩んだ。

そして経済の高度成長で生活にゆとりができてきた 1968（昭 43）年、福島市在住の級友が集まった際、かつての福女生と動員当時を偲び合う集いを開こうという話が持ちあがり、同年８月 17 日、福島市のホテルに双方から 30 数名が出席し、初めての合同懇親会が開かれた。

当日の模様は、全国にも珍しい集いとして新聞やテレビニュースで、23 年ぶりの感激の再会……、と取り上げられ、県民の話題を呼んだのであった。

この会は、その後、学徒動員歌「ああ紅の血は燃ゆる」にちなんで「紅会」（会長橋本行正、副会長島貫喜美子）と名付け、福島市内の温泉や二本松市岳温泉、原町、磐梯熱海温泉などで開催、親睦を深めていった。

思い出は走馬灯の如く脳裏を去来して……
（日東紡績福島工場講堂で）

遠い日々を回想しながら日東紡績福島工場を見学する総会会員

特に学徒動員 50 周年に当る 1994（平６）年 10 月 14 日には記念の第９回総会を飯坂温泉で開き、翌日思い出深い日東紡福島工場を訪問した。

旧聖堂で出席者 40 数名が学徒動員歌を高らかに合唱したのち中村工場長に相中、福女学徒動員生一同として豪華な置時計を記念に贈り、工場幹部職員に感謝された。

このあと工場内を見学したが、往時を偲ばせたのは老朽化した一部宿舎と古い巨大な煙突だけで出席者は「あの辺が我々の職場だった……」などと目頭を熱くしながら語り合い、感無量の面持ちであった。

紅会には、動員中、我々と起居を共にしてご指導下さった阿部勝郎先生と市村正二先生をお招きしていたが、この日ご出席された阿部先生はこの記念総会の出席者全員に対し、格言や有名な漢詩を達筆で揮毫された色紙を贈って下され、我々は幾星霜を経てもなお変らない美しい師魂に強く感動したのであった。

この記念の解散総会は、1996（平８）年 10 月 29 日、紅葉に彩られた会津若松市の東山温泉で 40 名が出席して開かれた。

市村先生は病弱のため残念ながらここ数回欠席され、ご光来の阿部先生からご挨拶を賜わったあと、「この会は所期の目的をほぼ達成したうえ、全員が高齢化したため解散する……」ことを決議した。

最後となった宴会では、動員中の遠い日々や 30 有余年の長きにわたり、10 回も回を重ねた紅会の思い出などを語り合い、夜の更けるのを忘れて名残りを惜しんだ。

橋本行正は解散に当たりしみじみと次のように語った。

「福女生とは苦難の学徒動員が縁でできた大切な一期一会、紅会はまさに余韻嫋嫋たりとでもいうか、さわやかで有意義なたのしい集いだった。紅会は全国にも希有な集いとしてマスコミにも何回も報道され、解散はまことに惜しいが、戦時下の動員から紅会へと続いた交流は生涯忘れ得ぬ思い出となった……」